秘蔵

序

信濃なる姨捨山は天造地設よりして
かゝる代々の国風のうたなる一もしるべなりつゝ
衆しの選集に著くゝ玄意乃きしを
かゝき田毎の九穂粒しをおぼえ和て
遠哥と伝へた俗諸の目をうつる
和歌の道の栄ゆるこゝ世第十編を著す

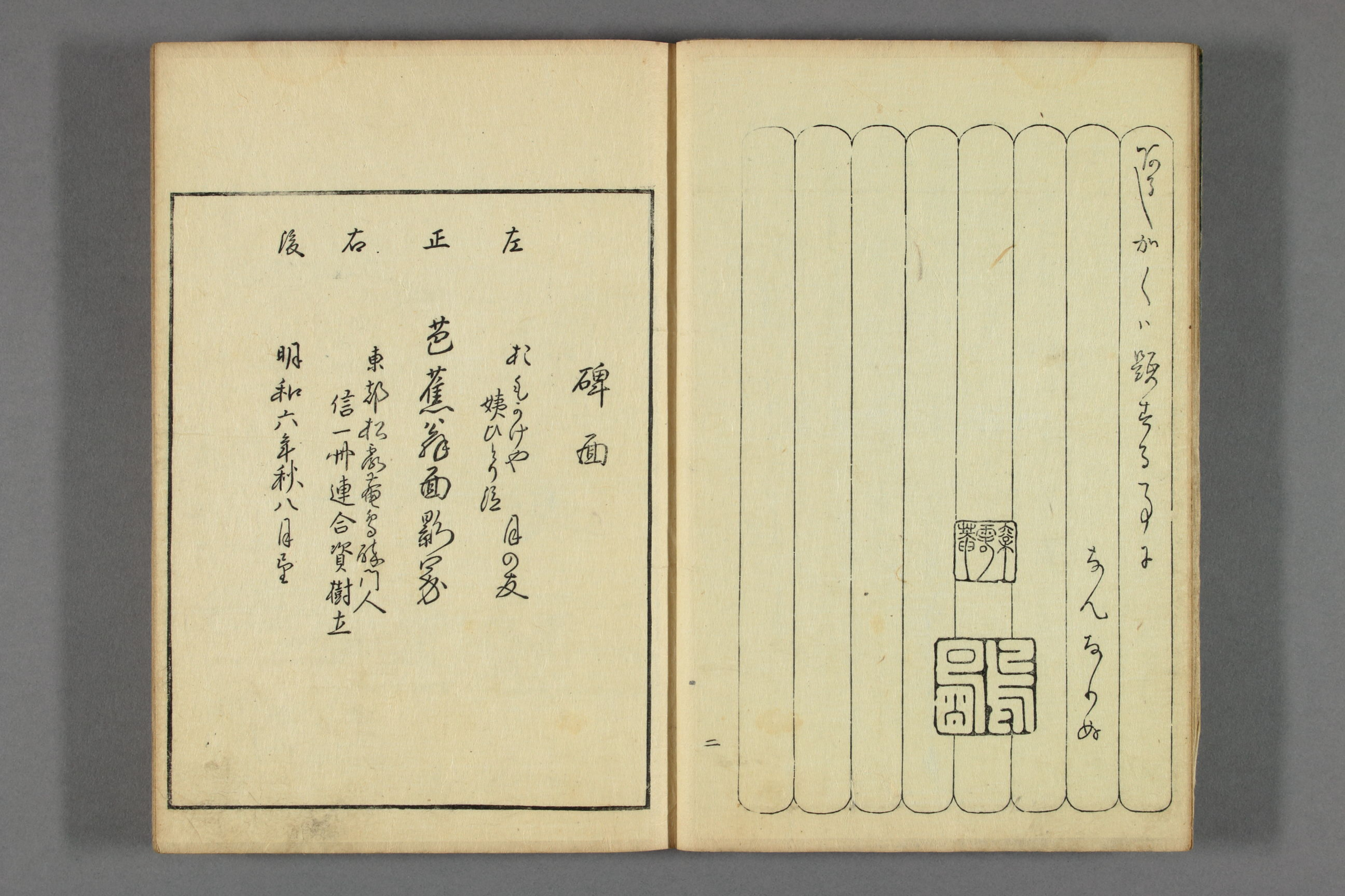
霊雲文庫

放肆をきて巖之よ宮ホ堂して一白を
畫む面影書紙をしして精神無地の至と
きて姨ひとり泣く家〳〵真言なふ力
雅列ふハ今も往月のあの海を隔ち足蹟と
なれり譴よ海内ようきを風のめぐりつて
雲乃ようく停る嗚呼徳の大山高く夜よ
我師を解居士所ホ也第ちの首そこに
鼓波〳〵陽屋よ淹暴〳〵日門面忘を為ふ

折ふ後姨石の傍よ碑を樹をきむるを
興事去ふ以ふ時を厚ほ〳〵ていはらよ止め
社なもよ幸多ち月めちて雲と隔ア家と
消ふて厚書ホく編ふるを歌ふ和神足ふ
白屋坊之を世確事の巖阪を越ひ芳燭
〳〵て志ま〳〵を尋ふ称ふこよ称ふ春の
矢代よ跡国ホ戸倉よ禁和ホ山こよを
礎ホ〳〵ホ〳〵ひ日門を教去よ教ふを

荷うの徒歌を拾もて集うるに此書成る
たゝうを惜惜然りとて此時に書類を
拾ひ二子助教一て請うを命一てめるを
うたうきりく編を研を以ちて建め請を
其功績たるを論うに良能てこの事業に
人しを歩まり風作たて一書成り旦御先師
多居士作中の遺作古人哲匠の言葉を
書中を節至ひ以て門請国去世の

風子の句を置め物是の為を弁請を
論うよとを文もて色うたるたるたるたるよ
其家録を見うを去るも締致を——て
風流竹馬——此集を此作
うも帯うい賤——多て二十集不拾の裡を
うたを去を去うたうたう原集を編て
を乃ち抜て此を照る日の曇らうう
了て紙名たれと東都拾遺拾の



碑面

左　おもものけや　姨ひとり居　日の夏

正　芭蕉翁面影塚

右　東都松尾庵芭蕉門人
信一州連合資樹立

後　明和六年秋八月吉

嵯峨の西山

信濃国
更級郡
姨捨山
芭蕉翁
面影冢之圖

姨捨之辭

さらしな姨捨の月見んことしきりなりけれハ
八月十一日美濃の國をたちて道遠く
日数すくなけれハ夜に出て暮に草枕して
おもふにたかはす其夜さらしなの里にいたる山ハ
八わたといふ里よりそひて冷しく高くもあらす
かとかとしき岩なとも見えすたゝあはれふかき
山の姿なりなくさめかねしといひけんもことハりしられて
あまりてそゝろにかなしきに何ゆへにか老たる
人を捨たらんとおもふにいとゝ涙もおちそひけれハ

おもかけや姨ひとりなく月の友　芭蕉翁
萩のした川岨のほそみち　鳥闌
あきらとよ鴫のたつやうへにたちて　昭房
ひるもむかひの木ぬきはまれ　路芳
持出て手をぬきさまに手とる鍋　指山

ウ

引しく雲の空はれわたる　路一
糸の束をひろふにとらる加茅　箕山
夢に影の返辞をしられて　己宮
酒くまき坂を越まへに秃となりし　宇考

嶷のはるを
蓴菜の培中ぶり十はう
日福路坂よ冥日の
未復のおもかつなる
ゆくはのゆ勢を肩よはかる
あるるもの義を見るよりて
題ハ当のるるたいるう
花はるまきのふもるをひも
千年を佛るやうり

路国
星白
多奴
書史
蔥山
古纂
素洲
策白
多弟

来るを被ぬるるるハのるる
ゆるのなるるるれまひるう
るるるる時白のるの跡の策るる
陳の留るのるるれる月郷
はハてしるる麻疹のるよ都るり
芸勝るるるるるるるるるう
家中るるる東橋よ明る居
白るるるるるるれるるる
巻結の花を塊積よれしるる

路芳
指山
立多
昭居
多深
字多
素洲
冥山
路一

君を乎惟光う毎
蒙日ゆき八艷しの善へ品
一とし〻爲今傳〻
きらんとしひう国子嬢兼
楽しと連い先へ来て居
桟敷て擦のへなる小ちきき
西の翻ゆ四さまり
碑のおゆむる者の近〻
ちきを端川葬仏

奴多
丈き
布多
れ篠
路国
執筆

御ものゆ姨捨を布て中秋月爲
山ゆをの雲いち紙の仁和を楽む
の〻ゆとめ歌人の得なり僕うたきい
只其取客を乗〻志ゆく拙き心を
ゆ〻先て今信流ゆ原〻嫌ゆなれゆ
白屋爲ゆ系信中ゆ躍決〻て旧友を
〻〻ひ多居士の志を遂て
蕉翁の遺詞を石ゆ〻爲〻姨石の
信ゆ立て〻ふ易の記ゆ〻て〻るれ〻おさ

[illegible]
碑を玉兎ヨ磨てちーむくハ往昔遥
いるを運き　天、極て隙きるほ　吁
知もるを知後世をそ世ヨ[illegible]てるら
さ[illegible]

月陰の四時の家のいやうき　十竹窗　宗石
却もきうる月もきあ[illegible]家の家　る家国　指山
堆一家の家[illegible]月の[illegible]　[illegible]物[illegible]　[illegible]深
家ヨ家[illegible]中[illegible]月　掃[illegible]真　路一

碑のおのおの[illegible]萩と月
[illegible]の田毎の家ゆるさいもむも
いしふるの影もみるる月の家

古稿下　[illegible]
草視真　路芳
狭川紀　[illegible]山

禅ヨおいて幽玄あ[illegible]
そ大を見るうこと[illegible]尚をむ[illegible]
園徒法宗祇法の家[illegible]
芒鞋を破里てまのはるる[illegible]
自然ハれさ和もの[illegible]姉指四[illegible]

人の口ゝ賢き事　祖蕉の歌言を
石ゝ苔して姨ひろ拾ひ樹ゝを
ゝ巻てまさく白尾屋居士の会を嗣
杖を結ゝて旧友を勧しゝ
遠ゝ今雅の称さし碑ともゝいと
密し　続書の玉宇を仰きて八十世を
ゝの碑ゝむしてハ載の履をたゝ
家かゝ月　みぬ月ゝ　ゝめの秋　岐嶺　路国

面影冢ゝ葉

信濃なる伝友ゝ冢を名ゝうゝ八十ゝ
ゝ秋八月望祭ゝ行て　芭蕉翁の碑を建ゝ
翁の月見ゝ貞享ゝの昧ゝ八月
望ゝ月なるゝ名ゝ栗津
義仲寺なる翁のを埋きとゝ冢の古を何ゝう
堂はゝ紙ゝ　襟ゝ遠きをいとゝ
ゝあるのあとを摸し埋ゝもゝ一壺ゝ

こゝいと拝在うかたゝかたゝ彼あのりくゝ公はしやうし
さゝひ碑のいてきよ彼はよき車よ載せ人〳〵
ちゝを鞍ひ家又聲を家るゝのちきうまさいりの
芝さゝをやさゝうまきはきめ栄西禅師のむゝを
あゝあふ人のりうかしお嗜吁菴の徳化のおさて
どこ彼ゝ一壺を城中よ義〳〵碑ゝなをし
まいゝせ人〳〵慇懃よおのもも西を多をのまゝひ
ちうひめ石友のうふさはさゝの此いめゝ倶よ
のうふも彼屋〳〵在うかたゝなるこゝゝ後の人をして

後の人よ伝よなる彼屋〳〵そも面影家八姉石のゝ〳〵
ゝておの伝ゝ松かゝをゝきれゝよまゝうこハ林兼なるか
八幡の里やゝの神のもらひまよの彼なれハ廣及の斧を
入ゝ人ゝ彼くゝ入ゝ自のあよれ指ゝ彼もかゝ自の
有彼山彼ゝの嶽ひゝ山続臺ゝよまゝひ碑よ
ゝよ氣霧川ハ急の屈赤〳〵ゝもこ石ゝもゝれゝ探よの
徑の一筋よゆきゝよ人を家ゝ文級川ハゝ屈く巷の
ゝむ巻之見して彼ゝ彼かゝ彼ハを白の閑仏嘯くよ
ゝうの雲仙堂の証のゝハ救世大士の伝ゝあゝや

所自之場とらもまた小船に乗を入て鞍ちよひらしく
物さうき地なりけれもの中の姨山とうの屋自の友おさく
天心ともうのひ私を入もさきとこ紙よりひそまら紙こうひう
きもしもむ屋なる外ところも山の表に所より地まとのこを
たて友とものの川の表よりをおりひや紙もいこ屋おさを
なるの面影影のおよかこまりて金雅の家とをいの多
をくこ志川ゑとを地ゑ山水とこ秋と巡ひいを
多表ハ吁浪たるきてとら見こうを外
碑れりこを自をこ紙よ掛こう

白尾坊 昭雅

良寛山上吟

姨捨月を愛しこの掛うみ　れおく

登山のをのくこ表月よ第しての日
又家およおもうみを高ひ章ひ
堂よ表しこ表ハりこ

各詠　不分題

仏さ寺月　天代
高燈籠　山さ寺を燈と高を灯をこ表
帳はりこ表ハこ表暮こる波籠　蒐山

稲妻
鹿の声
ちり
雲の峯
朝日
さめ
ふかし
鶴ル

稲妻に二度よ續く額の文字　路芳
鹿の聲筧の水へよ捷こそり　星石
ちり海の藻よ到る秋ちり　樣象
雲の峯月雲を刻む山なりも　古允
拙ゆくよ下無き雲くく鶴の翁　巨春
ゆさうよ行雲の雲と鶴　撫象
川音を外に流しを小夜きぬ　柳帆
大ふしよ咲きそこなを水の菊　又長
鶴ル雲れよくく　釈　麦邨
鶴ル雲れよの月

引る雁
雲
鶴

中邑　多深
路一
徳写　指山

ル雁よ高ふ花の風
ふの雲捷ふ月ふ
鶴雲れよ菊ふ秋ふ

本下やゝ
柏野
きめ
ふる
きり

鶴の翁ふ入梅の月ふ
烟の巣ふ八今れ本下やゝ
赤ひふ多ふ枯野ふ
星月ふ小夜きぬ
ふふ雲を樹の月ふ
月ふ小夜きぬよ朝波柳

八幡釈　八思
笹八山
石多
古簾
赤白
十郎

蓮

蓮の花雲を離れて高の多
鶏の鳴くよりあふ根芹哉

素仙

年礼又少

ねゝこと羅の絲見る月曲哉

一帆

細掛以芳

影まゝ〳〵と仰向をんみ哉

三色

白文釈孤

蝶

蝶〳〵や雲の仲を踏はめ

自

伊予川

準蝶

もみぢ

大き文字を忘角成きもみぢ哉

矢代

花了

扉の音

扉の音やぬるむき八重山の松

栢尾

雪布

落葉

蝶の間よ命のとゝ海ふる葉哉

葉ゆゝを八重の都よ情哉

立葵

立葵〳〵と翌も伸るなりき葵

戸倉

雪奴

蜀魂一声命の戦きゝり

雪夢

菓

菓よりなりて花ふり屑れ一菓の色

雪夫

菓の月や鄙波を芦を洗ひく

色耳

七夕

七夕や命よ繰る笹乃松

松峰

書解

菓陽色の石もはなはだ書解が

其可

三六尺立 舟を何を書の松

松少

菓の花

菓の花や恵よ眠き成の高

東戸

神代〳〵生空八重てぬ月星

白足

淋一楷を退ゆすたゐりる泓　紗雀
くる義秋の楷にはなれたるお　紫白

善光寺の夜明とこそはやりしう
篭りけてことも詣のたかへとこゐの
人々の寐依ありゐしく川あた
はるかなる花も跡に傍れく清雲に
满りりくれも系もそ縁なゝくく
おゐまぬ

ゆき氷ぬ皆月き日にロをぬく　柳居士
家さとしく入日の影　楚川
ちりとぬぬ露になるの耳まらぬ　随和
鎌の休みの投ゆしろう　雲糸
け里竹の下駄をとぬのかけさ　左丈
るうけるひく梅白の暁り　路洽
ウ
横ゐり糸朱の清機きぶ世界　麦径
ぬと簫の音のさにつきなぬ　其雲
ちと悪寒て片意八ちて仲人も　洽郷

[illegible]

[illegible]

善光寺の[illegible]所[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

柳居士

楚川

隨和

雲和

龍丈

略俗

春徑

其雲

[illegible]

ウ

横[illegible]朱の[illegible]世界

[illegible]の[illegible]

[illegible]

仲人[illegible]

仙人降ぬる十日の月光
何ゝを明らかに紅葉楓
さくらゝ岡一ゝを造る口
志ゝまいらせ乃盃坊主
幸子かくなん萩の咲暮
そよ風ゝ月も風流浦住き
一の宮居の岩を根ゝて
菜賣ゝ菜摘ゝ映して義さび
刺てゝ蟬ゝ鳴ゝ

金伍
斗南
楚月
東雲
蒼布
一角
芦伶
志郎
暮月

十五

二

世ゝ日ゝ月ゝ風流乳のいとゝく
櫓の法ゝ月ゝ
上京も下京も月ゝ
所ゝ時も月ゝ
信心ゝ孫の一大ゝ
海一続を
松ゝ松ゝ
新の皇石のゝ
仏もゝ虚の

昭房
振白
砂蓮
麦井
行芦
斗源
源白
桐白
赤白

めくるなる佛のあし跌目　徑川
山月に絶なまきあつのあくめ鴬　五石
槐飛し散葉にうつる　セ嬉
ミツ
泪しし賣状川の冨の札　ちの
ま侍の酔ふて一群　嘘石
ぬるく紙一つ織物ぞ世傳も　千里
なんなく棟に繕くかかる　中和
腰あきら繪箋ゆゑ初もの蓄　眠切
花の所ともなる雀写出　龍毫

各詠　四季不分

東の夢かも月淡の一日より　松代 楚川
一杯飲し庵を欺くかなる　雲和
むらぬ家にひとり葉の秋風かな　左丈
鶯鶴の落の實に月とはけん　女 路金
みとへ八台の店つまをきる那　筆巳
霧にして紅葉のかれ　伽珠
雨金の中を捿子京ぬるかな　孝井
積ふかし世をも輝なりきの雪　錦羽

日日見ひらく所を沙千郎
千重
井きの上を見ぬ
徑川
ひとりぬ沙ぬ
振白
葉もなき年ぬ清ぬ郎
隨和
雪ぬ上一夢ぬ
西像釈
石
清肥釈
一雪
月肥月
月ぬ雪の雲ぬ
一相ぬ流や春の雪
赤ぬ
つぬ何の坐禅を個代寺
巨英
雲ぬ山人下ぬ

ぬくぬ月を紀ぬ
懐ぬ
ぬ利ぬ白の友
松代
眠ぬ
蕉ぬ
舞ぬ風ぬ隠ぬ
其ぬ
舊ぬの跡をぬ
芦舎
ぬぬぬ
暮月
名を綱ぬ笠ぬ
八十
連雀の尾ぬ
蒼布
山賤ぬ沙ぬ
花由
松蓋の影ぬ
孤有

[illegible]の墓標の袖に寒き佛
[illegible]の花うつし見まほしき階かな
[illegible]月[illegible]よまうゆきとの影
木[illegible]や鐘なき里[illegible]の雪
[illegible]月[illegible]軒の菖蒲の枯るまで
簾の[illegible]掛のもぬるまで[illegible]
遠近の芝塚もいとはしく[illegible]
月影を見[illegible]
[illegible]

桃[illegible]　女
東[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十八

[illegible]の[illegible]
[illegible]の暮の木[illegible]
[illegible]海近し小[illegible]側
[illegible]の髪

帝雲
[illegible]川
其雲
麦語

木曾路

[illegible]千仞の[illegible]を雲と見わたす石
[illegible]の[illegible]渓流の[illegible]
[illegible]と見れば蜀の嶮岨[illegible]

あつまる客に旅人の目をさまし　多待居士

杖をもて天のさら給ふり

このとつれ燭も居りぬ笠の上　左十

岩に柵を凌ぐ霜乃蔓　麦二

たゆ風にいく四阿のちらさるに　め毛

つきかけ求ると隠しやうすこ　玉壺

身の秋も仏にこの紅葉のさくれ　之帯

尾長ノ峯をいはの暮らく　三机

ウ
ゆあまれし星の晦日やあり　稀鄉

家は之しあめくく禅へ　麦闇

きまりし中に花も嫁の一葛篭　不改

連哥董りぬて仮名にとのかく　有常

馬しき身なしひら国の代なるり　貽居

日をたら々森松にうまし星　琴字

画の骨を毛集思ひし生身魂　志仙

新らまし半袋に蓋旅居角力　女子

麺桶のうれ枕に目のさえて　素耀

さくを後風の古堤なり　子中

内侍殿田隈殿様に花の時
堤のみかきを猶ほどこす
御の給ふ彼岸中の日刺繍
ゑのもとの百貫のうち
少雪をはらひ給ふ
を車に蒔殿のつきみ殿
御手ずから給ふ不
思口ずさみ給ふ身のうの舞
給ちきに出る蓮華
流星

百石　徳石　斗石　壱二　麦四　玉壷　九十　ふ政　琴宇

二十

三ウ

いかなる初ての軍にきうく
康上戸の使者都セハ康おるとて
家ちを信連に給ふのおろき
菊川の郷を実義の母
多ちひに馬の乗ひ
何事に南中御ふくいか
唐の軍を見てやいよ
中見ものを尾はれくゆき出
外名帳に記四郎

百石　ものも　昭信　方常　扶之　之常　まゝ　のゝ　三扶

安[illegible]の本[illegible]
日[illegible]
[illegible]の久[illegible]

執毫

各詠の序文

階[illegible]原[illegible]
見[illegible]
懸軍や伽藍の[illegible]
高[illegible]の川[illegible]
[illegible]の上

上田
[illegible]二
釈子答
玉壺
白石
[illegible]改

約[illegible]毛[illegible]
行[illegible]谷[illegible]懸の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]
[illegible]

琴宇
志仙
[illegible]中
倭石
[illegible]之
牛石
[illegible]
[illegible]
[illegible]

松の中に紅河の紅の
葉の色や菜の花の黄
ゆゑやらん春の花
春の金の檀の新芽の黄
陽炎や見る見る兎の
雲中　帆を輝く
山陰や細き雲の秋の暮

有常
菜洞
三机
雲帯
松毛
麦岡
龍十

蕪や高く長く伸びゆく

市影
松魚

松露菴社中

おろしまつ赤き柿の帯　口戸　童牛
明月の月おろしを見て
明月や酒屋をあく山法師　楚諾
夕顔の庭一枝出る蓑の
夕顔の蔓ふ蔓ふ紙の目　花径
ふつとたて出さるる柳ぶ　る寺
蟬の金ゆりあるの小袖　深魚
甘蔗を手蔓ふ蔓ふ　女　徠来
羽搏　菊庄

秋夜月海一望月沙漠
菜の中よりうかぶ月やはり月
の如くなれども蘆葦
松の葉よりうかぶ初月も
四十月の翌うつる遠きつゆ星
さゆるなき樹くらき高原の秋
時もなく一声こゑ鳴くこゑ
遠松一日よりうつるのしらが
の千鶴の竜の都遠ひとへ

泉之
大来
宇梅
春原
坐象
小竹
熟記
釈 柳源
鶴羽

經盤會の見の味のなりき
何かあるを歯を八寸ふて柳か
梅ちるか陽まる家ふる箱
月の知ふを乗なり高燈籠
軍陣なるの長ひろ石のうへ
ふ底の見ゆふとう物を宗和
梅ふるき雪をつきるか出手
又一夜豪のうるのの月
蓮の長ふきよき見る僧の和

朝阿
泉路
秋之
星戸
千羽
東楚
西和
二味
玉時

乗退て大工見て居る羽織が
きて見ておわるひとりの
男仲の毛入の中日より来
乗たふる瞰し梅の出
鶯梅のうこまれる男九る
藻きて中寒きは屋上閑
来ぬきの回出して見る
蕾行のあきらかの月
ひう鶯の鶯の戦きう

呉川　石斗
江左　元白
玉魯　弓雲
眠玉　花子
石東　太甲
菊人　女　星布
眠堂　箕田
武義八王子　出橋　和誰
陳々　爺　文卿
急生

蕾
うきの行うた大石の白のう
うきの仲の鶯のきみを通あうき
燈の竜の灯をを鶯をして柳の
ううの乗すの障子の紙一室
梅うの乗の佐川田弓を乗白
なうきみの馬を梅出て梅うの
鶯あうきの志川をこを柳うの
尼寺の伽れて石は乗きの傘
いうううをのりをを乗をうの梅

りか里の心きを傳へてひらかれ　栗橋　素人
鷺ゐる川解て流るゝ松の雪　ちゞ　山童
待しくて逢ふにまかりゆく郭公　山螢
立くらみふ鳥を定むる三井の鐘　令雪
引しく鄙の末中に姫條の蘭　炭如木　風翠
寂しさや千個織て松の露　雑司谷　鷺桜
昔姫が葉にちりくる蔓の花　桶川　松三
うき紳の退て影の箒かな　下総銚子　森松
花をこめてやとけりしま　千鶴

以八雪見てたちいでたる霞かな　市芭
梅咲くや戸樋にたらしの水の音　鳥朝
走る帆をそこに見て居て涼しさ　仙雪
鶯の巣や木の上に人来てとび　富鶴
笛の音くれ見えしは今柳かな　虎芭
きく川の柳にほそくほつれま　石井
涼しさや星に揖ぎ流れ川の雲　濱野　鶯社
梅咲くや水の解しく人逢ふ　淀笛
花咲くらむ居る木進唄　宗武

海苔をうかべたる
うらゝ〳〵石に瀧戸に響の声
牛山を出る日豊いかをうこゝ
ろ
ひかれは琴一ふしとゝの音か
涼しきに男鹿女滝よ和の色
紅子塊のうゝ山時雨
鶯の高きよ竹里東の鶴
山賤の春雪雄鶴
吟海〳〵の石の百ふ海ふか

曾赤壁　兎石
少女　眉尺
女　笙白
盲人　春夜
釈　兎線
千葉　古　白塘
竜
一

牛ひろう河ふる風人蓮仲
年春〳〵ゆく掘戸〳〵鶯ふる和
を解ふ一雨〳〵ふ曙の和
和の根ふるまる暮て時白ふ
うんこゝ住ふ郭ふ苔ふ東
鶏のくゝまふ雲ふ屋
印の色ゆいふ色ふ過き宮ふ
子親ふの徒目ふ星ふ
星ふ月ふ雲ふ強て色の秋

元川　素川
寺崎釈　遠莫
大虚
上総東金　白林
水雲
主　梅
京の白　宵陳
東金　木の西

橋守の居を出てゆく柳かな
山うみの影や小町のうら見里
蝙蝠や見世さし窓に見えかくれ
何ふる川と橋の長さや秋の月
五月夜に海としらさき波の音
きくの香や伏らわさら老の秋
橋立をさしけて吹かぬ霰かな
焚捨て何ふし八庭にこのやうかな
とのよこて余めき付の鹿の聲

百坪 浦川
椎塚 玉雪
武藤 沾市
家の子 柯香
坂田 其松
横芝 志跡
梅止
総々
如月

見かへてなしぬ本来し初櫻
ち川くし紅を横きれひたりかな
杉あれし障て見せり月の雲
りきもえりうあらん橋乃志も
紙一重何の夜の冰塗ぬ露ところ
化しき出き艸を古葉にかゝる露かな
名月ア紅二日まちぬ月の出
早乙女何ぬけ唄て畦とり
春しき霊塚暮て荒る櫻

原田 止嶺
徂り
冨田 鳥船
釈 素仙
片貝 卧星
兎子
吉田 至涼
相模用田 鶯秋
春塘

蓬来の枝葉をむ須しまつ世　雁東

いつ迄も見るとのかゝる繁さし　釈 梅友

眠しなき村のてらしまつの白　有馬 戸蒙

あらしきも千里にむかふ海士か家　摩耶 梅的

山ちかき本も浦も見えなかりけり　素白

千代家にて

松かゝるおもて磯の家に春の人　玉桐

帆をとめる梅の日和や石の皃　芳路

春の〻く松に行き渡く野べくかな　湛斉

むつかしく今日遊まてきの花　几 吟

家のまゝなり畑一まんにて隣の春　布雪

咲きを宝くも思ひ出にかな　白 梓

梅咲やかへりし春の人通り　鶯柯

まし柳おもかゆ人にかくれけし　梅鐸

鷺とふや蓑をとりて立津くし　呉田 洞秋

何ぞかさきくつで見ろ帰るむし　女 几 橋

荒れのもさりは浴み桜かな　主 酔

鎌入れる春の出来かな郷しかな　常石

五月雨の空しめりし摩耶の麓
小雨やみて見る海はうら
陰空の雲ふかうれわたる月
湯桂よ一ちしるむ柳那
梅ふくやれもりむ子川を
多ら寄て海の見ふ柳が
樓柏はきしるえこ雪
一ぱる彩の撲ふし旅童外
陸路おれもひ出てれる

小稲葉 雪語
戸塚 鶏父
古都 行雪
七つ木 居指
戸塚 灌
飯田 基
三崎 市

はてしなき海を居野の鹿
稲妻や海より出むる月
の雲月ひとしれぬ野干
帆はせ船を海の
川やきしれ我をやる
忙の年障るの宮を尋ね
雲雪富士一度して梅の
流れ水の骨折る柳
馬の耳きれ上り絵の

八幡 釈 吹雲
新古 斗 楳
赤羽 松波
大磯 白羊
宗雪 釈 大梁
上野沼田 春路

[illegible]

如布
麦苗
雁来
梅志
大沼
[illegible]定
南瓜
牛蒡
白由
赤葉

[illegible]

白井吹屋
[illegible]
民[illegible]
一雁
牧
宮和
月[illegible]
麦蒔
上白井
伏[illegible]
醉雪
雁丈
卜二

[illegible]　横堀　羅多
[illegible]　花　小野子　三巳
[illegible]　楚雲
[illegible]　柏戸　伊香保　持谷
[illegible]　重房
[illegible]　文石
[illegible]　勇山

[illegible]　文鐵　榛名　岳月
[illegible]　里松　三ツ峯　雪桜
[illegible]　白烟
[illegible]　赤城
[illegible]　芳山
[illegible]　白竹　常陽之友田　嘉丁

咲鏡にうつしこゝろ安花也けり　甲州初鹿野釈 杖流
伝六がまゝ世をすゝむる蛍竜　奥州 釈 世蓼
秋の川や雲ある津ある山はなり　居毛
鳴月に沖も錦の帆をあらし　大坂 石嗽
来その西風の舟の纜を戻しけり　如立
来の念翡翠のこちあれをこそ　駿州 嘵居
梅園や酒ありて人も目納職　伊勢 蛲扇
けりまゝあじありせりきあるま　淦波
小原女のうちいかさしを借しあれ　呉扇

四時文通

きし降やあまきは凄きし秋堂　居也
つきあるは茶屋の花ありも橋に、
我身もありのこきりく身を友　る也
ある月や笛を横ある気を枕、
梅の香いや何ある一座もの列　享石
ありあれの僚玉繰の鶴のゝ　芋月
大釜にめしを炊きつゝ蛍也らしき　一、

芝蘭の佳きかぐ殘る燒野哉　昨居
本為ハ走るかるかる御生會　香的
ゆく春や仁王の髭ふるひ兎　、
うの花やいろの花も咲みより　石的
ゆうかほ其日の多きより　、
いもの葉の裏見て通る暑哉　、
ふ白や恵を陽炎ひる和　字石
鬱陶しふるすかるかきはる　宗居
かるのみを出るふる苗哉　芋白

類屋ふる苔の色都ふ結ふ哉　、
早しめ和ふを為ふ不ふ腕　昨居
ふ月ふ松や引きて備ふ　香的
るのみの蛙るうたき地ふ為　、
ひふ月ふ結ふ就ふ川や秋の雲　、
一ふの蔦ふもあふ蕎ふ秋　る的
情ふおもひふるふ去ふ為ふ　、
ゆきふ和ふ蹲ふ蕎の時ふ冬　宗居
とんふ代出ふ蕎の名屋哉　芋白

四尺の長廊下秋のくれ　丶雁
り深かとゝ一際梅の色　昭雁
陰吟や吹ぬきを過くはきの色
積雪や物ゝ車　雁
一日も濯石すゝてを雪ぬる　雁
ゝゝゝ長廊下枯柴の　子石
戸さすかてもうの水かす　芋春
長川や蕭々暮ゝ星　昭雁

當時名録　四季不分

本のくまて撰ま帯ゝ橋の郭　白戸つ琴
澄ゝ入出ゝ田堤ゝ　止絃
ゝゝゝ下川ゝ橋の星　尺巳
ゝき仲ゝ咲ゝとゝ橋ゝ嘉　伊勢如之
六まてゝ乞きゝ梅の花　加賀見今
鶯ゝ鳴ゝの柳かす　玉蓑
梅ゝ雪ゝ笠ゝ紙ゝ月きの月　浪川
山ぬきや絶ぬ流ゝ花の影　ま化

祇園會はたてのやまをうこゝ
の月やふ破の草屋もとゝの
畑中の菜ようけてなれ何ハ熟れ
林寒く流れもしらるる皆
月涼しゝの葉成るも只音
ゆしらるゝ人まもられぬ海のゝ
稲妻を雷の音のゝ
うゝ見るゝ
なるゝ月星雲霧ゝ梅の

如本
倚之
飲白
書
素園
伊勢 伽涼
入楚
二日坊
蘇峯

雨雷やまを夜の水ふ鐘ふ
梨の花冴てゝ命ふくゝ月
びくゝゝ墓の出て月蛙
ゝゝ海きゝの波走の鏡
ゝ海ゝゝ故のゝ琴やまの
沢山なふ松ゝ
やゝ蚊きの歌ゝ
世の中ゝ海ゝの
まちの月つゆ梵海の風

京 陳子
紙中 康工
尾法 ト市
也有
紙中 八龍
玉斧
石 茂
吳農 玉巖坊
江戸 蓼太

仲花は坂東の産の産の
ものと又母衣の根芽はく

武蔵 柳化

緣くるまて

屋敷の月の雨のしはなるうら

名月の頃くらく稲荷の

七仲やまくらみの中ふし

初は絹ふ錦の織はは埜の

まくるの白瓜まなう中沢の色

代士の顕忠しくの霜

摂河 乙児

京 文下

江戸 諸九

尾張 至芳

尾張 遠義

摂 陳雅

ぬしのなき代出て来ふを解かず

緣くるのゆきを出うの初魚

くは仮本は一日まむを解うの

はるとあて

江戸 義六

文尺

書成

鶴 まくるの仲の花編を見人

寒い夜まして待さうはるき義

袖 まくるの人うの出

ケくるの跡くるの来るの私の合

川の秋の藜を枝はなり保七

尾張 白尼

神後

神家 警大

大坂 弘川

寸馬

伊勢 巳竜

新しくにらひ昔を越はやめかな　信濃 柳沸

梅咲や何き日の白ふ道となり　千丈

麗の拳や晴て来るなり　積庵

きし寐や木瓜の中ゆく水の音　鶴山

姨捨の月や曇るを人も従う　秋名

くらしきや中にも満川て竜ひ流　耕自

のちの月雲拝き川て行寒し　蟻蝶

仮橋にさもられるる大根川　豊後 麦霧

夕あらし苗もハ水に何の埃かな　葉里

日の鐘の出さこ流ちぬ松に流月　江戸 抵石

石垣に一色と鶴生まなり　春々

春しく日の作律き柳かな　義抵

春風や積川く春きい桜の絶　琢玉

何となく鐘の声やく鋭の秋　大鷺

弓く目分の命を鋒見て遠く春田かな　播州 山雪

禅寺や青ともちる青さは雉里　奥州 春竜

松露庵にて

初雪や松なしとこる西となり　越中 首菊

仏壇の香の仲よ我ふりきみ　越前　蕉白

ちいの音空へ消る蓮ひかり　紙屋　梨一

陽光ゆ何してくへのゆゆ先　境屋場

本曾にて

食はいいのちゆきゆ本曾の畑　加賀　見推

おもしゆゆゆゆ白てゆの月　京　貫古

夕霧陽子の解隠しうり　江戸　再悟

を打や一夜さくとの言　丞芸

梅う雷ゆはあ恋ひ　又何

はるかの　古を恋ひ　色又

汲さゆ車ゆ白しを解川　乙何

家陽毛ゆ定まいたうう　古麦

みしう夜ゆ寄ゆきく鶯の夢　蓮朝

梅う色ゆおを見制ゆ婿のゆ　美珠

ゆうゆ待ゆ飛ゆうおゆ月　五渓

代祝を守ゆはゆしゆ梅のゆ　雪香

いう仲ゆ岡王の廟のゆうう　牛渓

おりゆゆ見を蛍見せし蘭しを　蹄月

中人より手紙を受ける
一川を隔て宝山寺の郭
その月柳を色あらしの
明月や生の姿の岩くぐり

京　子令
一瘤
江戸　卷阿
大雲

八下巻舒

明けそめて京一てなくハ秋ひの
雲ハ雲ハ巻ハ舒ハ見ゆ巻雲
秋冷や蓮をちらす花ばちす
蓮もまた白きこの花を使ひ
明け猫のこの花を使ひ出す
小夜時雨陳一たり傘のもと

明春
信德
素堂
去来
丈艸
蓼蒙

日の春をたちそめて鶯の初音も
浦風の吹千日なれども入
金乃月高くさしのぼるとき
禅門の草足紙れる十夜哉
山〳〵や一ときぬしは秋の雲
其角
蓉雪
夢坡
浮六
涼莵
文考
尚公
允北
荷舎

電馬は新しく紙はくゆる香柏
春の日や菜の木畑より小諸哉
北鯤
三秀
りんゝ哉祝ふ白髮を隠しけり
越人
高燈籠金をみるまは能ず
千那
木履ぬく情よ生ける蓼の花
木節
蓼の花蓼の緑に里
史邦
海山の雲の峯に雷吹て
乙州
山杉は年〳〵てもなき名鶯哉
鄙名
くく糸義の一ちを入るゝ
利生

綿蓋のけハ〳〵しさあらしの暮　孤屋

かゝりぬきをあぶる蘭の秋の金　杉令

仲秋　任口

月見　雲の秋ふる野の一天　一笑

躍るゝ　きくよハ酔て金の月　李由

行燈を繁昌の日ぞ躍り　木因

ふるゝ行田の時の鉄窓　惟然

埼玉の小ゝ名ゝの月　洒堂

明るゝ燈ゝ　銀郎　拳白

まゝしきや牛を庵をと住捨し　曽良

ゝ民庵の四ゝをとゝ

草庵小綿洗ひしゆゝ　ぬ丸

走僧も仏ぬ雲ゝ　之道

なくまみる齊ゝ鉢ゝ　舎羅

七夕ゝ戸障ゝ夜ゝ　荊口

塵濱ゝ月ゝ浦ゝ　句空

人ゝ中ゝ柳ゝ郎　浪化

遠山ゝ時鳥ゝ　秋之坊

鼻あかうは鶯なれぬる花薬のもと　万子

すきあての髪よとぶ蛾や夜の虫　昌房

食はぬ木曽の白ひの椿もの　岱水

安心の宿もふるし秋のくれ　枳風

鼠啼いとゝ眠しぬきの暮　春和

蚊子のあまるこうけの佛のいう菜ち　高川

虫干や幕を張ればくもの　ト枝

鹿の鳴よくの見ふくろう　一髪

崑蒻の名と成ぬんやう　李宝

くの花ゆ星のくもゆ　露沾

色の影鶯のやうやせすき　探九

障子鶏月のなひうち柳ち　素竜

芭蕉葉ハ何ものなしるし秋の風　路通

笠とまハ六十ぢのしるし　園女

屋のさや燭て待夜のゝやうく　芳樹

くゝ飛すゝもゝ体ゆ流もゝ　智月

簾ゆて後書なん涼ゆゝ　秋色

ゝ光ゝ早稲の中ゝ曜ゝ　言水

秋　冷の夕きりぎりす人の家
おりゝ出てとゝのなきし柳かな
うゝ飛ぶ山伏見えぬ里の秋
梭桐の葉の霜ふるしかな
白の暮かきのうるゝ軒ばかな
涼しさや竹掛ぶり藪ばかな
戸障子をのゝ音なくなる
女郎花樒よ折てわらもしう
の古根ゝ高き所ゝ南

兎貫
方麿
当吟
秋童
二系
ま弦
系札
松吾
俊仙

四月八日ゝ小雨降る
柘の葉ハ葉ハ花
蓼栗ゝ谷ゝなる蟹の甲
やきまれゝ走里くゝ白河原
ゝ賜の帝山ゝ笑ひう
ゝ押ゝ反田雲ゝ時雨かな
ゝ鶏ゝ羽白黒鴨赤ゝ種
ゝ鷹の臂ゝ月ゝ夜寒かな
ゝ柿をなる沈て思ゝ十和かな

吼雲
万平
祐甫
系固
室玄
聖ゝ
忠系
畦止
裾芝

くりくり海月よ文なまこが
素のゆさゆさんこんの貧のふるしりう
鮭〻〻〻干鮭賣とゝめりう
石臼の割まてをれしかも石蕗の花
いつ鮭かまつもゝ鮭の苗
元日の豆とゝ絵なき猫の玉黒
晨〻星の横町ふるかも吹あれ
霜はれ雀おのうめもかも丈竜
撥ふる馬業ふるゆもしか

車庸
杜國
与茂
胡及
仝睦
竹戸
ゆゆ
園仙
水芹

〻〻〻比叡のゆうも袷か
川人のみのをもなしぬ雲か
枝をれくりうえもゝ絵ゆ紀
源もきかてもゝ思ふゆみゝ紙
陽炎ふるの眼のゝ絵〻〻
大名の田星もゝりう秋の私
ゝゝりう袷ひのゆめ雲ゆか
由井う濱よて
四月ふ海ゝゝ櫃ゝゝ

舍朶
多文
沾圃
黄逸
拿下
私及
桃隣

岩箱

出うりの樵夫の庵の丈
伯父のとかしはそなへし木の芽哉　春日
きそ〳〵す濁臺清て写るまうら　徒吾
紫陽花の下川あるあ乱白川　素秋
うの樵夫の髪の蜘蛛哉　白川
稲ばなの朝売焼く壁の色　一晴
祇の日の女はうちの踏く　阿言
其の日の出の葛の裾ゆはく　琴谷
秋の川乱ぬうの清乱の蛍　李山
　　岨邑

菊の香のうの清く昇る時の月　弟因
行を見て写る東のう縁　屋之
うの都の夢ハてしなうう　芦水
の秋の節の先まりくす　杜菱
　石動にて
きし命てうのいの岩井　司炉
うう夜ハ明まう初秋　麻父
一羽飛ひ二羽ひの声ハ鶴哉　巴輝
志うの野の之上の歌田の稲　雲程

神の長多賀の栖るの海けぶり
きゆるもおもたなびくかの郎
り長を菓ら歌ふ長まず
秋月の中より明るの海
夜くを使より長鉢き
特人より長鉢き
松八皆鶴人の長鉢
松を郷ら鶴長鶴
長の宗長ふ八みふり

兎士
古山
茂秋
古次
及朱
封卜
其行
大阜
島洗

ひきふる世より花の長
待長の翌のいのちハ翌のの
富士見ハ笠の雲隠れ
おりし仲石まなし秋暮め
畑中ひとうの壁の柳か
何程のけふ長郷ふ
菜の香ふ蒜の香ふ
塔頭の見て清ふもみふか
雲ひふ長ちまつ初時

紅波
屋人
梅路
温故
花菊
曹北
倚彦
曹正
木兒

去き月も同じく磯の波
玄冬のゆきて帰るのわかれ
り果を惜しみつゝ
明月をとゝ臺一面の
鏡掛て下界遠き初雪
志佛も弥も四十雲の
ゆきうり深きうりの川
年なめて荘士の言葉
草も木へ枯てゝ霜かな

馬光
宗陽
竹茂
南川
古由
仲也
可
沾徐
玉賈

淋しさの底をあふて添ふかな
陽光や蕙り羽をとゝきす
ゆうかゝ既よ出うの鏡の影
年暮て生よ冷るいうかな
代ゆけハくの国の年く陣かな
寒都も暮れて通るこの湯
ゆきうりの高の鏡の乾くかな
ゆの絵よ波の中てゝ柳かな
雪のうちきゝ鶯のうりうり

文素
可
海居
笑鶏
古岸
千杏
君山
東梢
吉亭

隣からもち拂ひに九合杯　東睦
戸に凍さし鳴子ハ起て不鶉かな　空然
赤樱の花の稍々たる宋古寓　亀徒
夕暮の隣垣より動く柳かな　曾介
秋むきの一株めらか菊かな　墨領
春雨ぞ晴きし猫の恋　龙以

四季の部

山かしこ茶筆述し梅の翁　芭蕉
艸の葉を落るより飛ぶ蛍かな
ひる顔しほれ露もさめける
涼しさや蒼みる窓の高鮮
さし窓く涅槃の暮の鐘の声
紫陽花に紅もさなきさ日かな
渋柿の赤く伊さきよ秋の色
岩坂の隣もなくて千鳥かな　麦林

一はゝ屋のたわひ揺うちふ
ゆすりの之彼まし はやめ賣
路一枝たて見せりきの秋
玉眠の遠 雪忌寒 松の色
汐くみの帯ひきなるゝ寒ず
うんこ多 春雨むらの岸ゝ居
そもの揖よ極ふ春雨ず
勢ひ〳〵りそうきの電

柳居

多醉

追加

仏身おかみ山毛ゆひのちしそ
走僧の稚子ひうきうめ
京の雪やあそうふあきうし星
なの貝ぬくゝ見もた屋美ず
ゆゝの川底のまを伏見う
秋のそゝ尖アそりの星
ゆいうゝ猿ふらみ ふの言
ゆひ立て見もたれば萩の花

越後 鳴海 曰
信中杉代 眠 吉
須坂 不語
素人
岩村田 周布
岷山
信夕
鉢船

[illegible]

[illegible]

[illegible]

風流や志の秋を退き自然を楽しみ千を求るの
風に客心を去て導なきもとハこれ無一なり
信中の詞表うを絵をひらきて碑を
裁立て故を温るハ学ぶを以て哉諸邦の
俳友羨むるもてもの志此及ぶ数ハ何を
天下に名もそ風勝加の産なるハ此
月称うの歎を多と少ひ志と云ひたた
味ふ序う風雅の冥物なるもハ心
松露庵主人依然として序らもむ俗
なるの句 柳樹 柳樹のやをなるし

狂客を待ち面白の労も笠を踏きて烏を
湖畔一ぬくを閑をなきむ深の風色ハ
喩を引き扶桑に比るをなきハ口を
推く千曲川を巻く雪ハ白く月を
隈なく秋の風色を何を者あてハ人の心
何ちもとめる者ハ何なりハ何なる
少をこの浦を吟てら多なるとゆ某
法師ハ中さを作るまとに作るまこと
月中の弱を温くもらーなる
峡接の杖を東てをく四時ものと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

圭肆 御書所辻村也寸法
本限十二丁目 近江屋長兵衛

彫工 木義 木重

尾